

健康生活情報ナビ

なんこう ステロイド軟膏

ステロイド軟膏は、皮膚が何らかの刺激に対して、自衛のために起こす「かゆみ」や「炎症反応」を抑える優れた働きを持っています。このためアトピー性皮膚炎や急性・慢性の湿疹、虫刺されなど多くの皮膚疾患に用いられています。部位や症状により、クリームが処方される場合もあります。

皮膚疾患に優れた効果 医師の指示に従い正しく使用を

ります。

ステロイドとは、副腎皮質から分泌されるホルモンの一種です。ステロイド軟膏という、過去に誤った副作用の情報で拡散されたためか、効き目の早さに対して「怖い」と感じる方も少なからずいるようです。しかし、医師の正しい指示のもとに治療を行えば優れた効果のある薬です。怖がる必要はありません。もちろん薬ですから正しい使い方をしないと副作用が生

じるのも事実です。例えば患部に置くように塗るのがよいのですが、刷り込むように塗ると、その刺激でかゆみを誘発してしまう場合があります。また、軟膏を塗り過ぎると、皮膚が薄くなるなどの副作用もあります。このようなことを防ぐためにステロイド軟膏は①弱い②普通③やや強い④かなり強い⑤最も強い―の5段階に分類されています。

医師は、患者さんの年齢、症状、患部の部位を十分考慮した上で、適した強さの軟膏を処方し、正しい塗り方や回数、指導を行います。アトピー性皮膚炎など、長期に渡るコントロールが必要な疾患

の場合、症状により処方する軟膏の強度が調整されることでもあります。

強いステロイド軟膏に変わった場合、不安を覚えて使わないなど、患者さん側で勝手な判断をすると、かえって思わぬ副作用が出てしまうことがあります。また、独断で塗る量を増減しないことです。軟膏の使用に不安を感じたら、医師に不安も含めて相談し、納得したうえで治療を進めることが大切です。

（1面からつづき）

難しい手術となるからです。その問題点とは①肛門が残せるかどうか②直腸周囲にある自律神経が損傷すると、排尿障害、性功能障害などが起こる③きちんと切除できないと局所再発の原因になる④肛門を残した場合でも頻便などの排便障害が起きる⑤狭い術野での吻合は縫合不全の原因となる―などです。

直腸がんに対するよい手術は、骨盤にある臓器の機能を残し、がんを取りきることで残す。直腸がん手術での腹腔鏡下手術は、カメラの拡大視効果により細い血管、神経がよく見えるようになり、正確で出血の少ない手術ができました。これにより、排尿障害、

性功能障害を減らすことができます。ダ・ヴィンチによる手術であれば、腹腔鏡よりさらに精密な手術が可能で、肛門ぎりぎりのがんであったとしても、進行していなければ肛門を残せる可能性が大幅です。

▼陽子線治療も

次に当院で行っている直腸がんの放射線治療ですが、局所再発を減らし、できるだけ肛門を残すために術前放射線化学療法を行っています。手術後の病理検査でがんが完全に消えた症例もあります。がんが消えたときは再発しにくく、ことが分かっています。

また、当院では直腸がん局所再発に対する集学的治療として陽子線と手術を組み合わせた治療を行っています。直

最近

よく聞く言葉

「百日咳」は百日咳菌という菌によって引き起こされる急性の気道感染症で、咳、くしゃみなどから感染します。疾患は小さな子どもにも多く、乳児がかかる死亡する恐れがあります。

1950年代にワクチンが開発されるまでは、日本でも年間10万人以上が発病し、その1割が死亡していました。

腸がんの局所再発の患者さんで、希望があれば手術と陽子線を併用する治療を行います。再発した場所をできる限り切除することで、治療効果が高くなると期待できます。

今日の話のまとめですが、①直腸がんに対するロボット手術は腹腔鏡よりさらに繊細な手術ができる。がんの取り残しがなく、神経障害を減らせる手術が期待できる②内視鏡治療、外科手術、抗がん剤治療、放射線治療の進歩で、直腸がんでも肛門を残せる患者さんが増えてきた③最も重要なことは早期発見。大腸がん検診を毎年受けることで、早期のがんの発見が期待できる―ことです。大腸がん検診をぜひ受けてください。

百日咳

その後、予防接種の普及で患者数は激減しましたが、近年、青年・成人が感染する事例が増えています。国立感染症研究所の8月の発表によると、今年の累積患者数はすでに1万人を超えました。その約3割は成人です。

百日咳の潜伏期は通常5〜10日です。発症すると軽い咳、のどの痛み、くしゃみ、鼻水などの風邪に似た症状が出て次第に咳が激し

くなります。息を吸うときに笛のように「ヒュー」と音が出るのが特徴です。一般的な風邪であれば症状は1、2週間で治まりますが、百日咳の場合は咳が長期間続き、中には数カ月間に渡ることもあります。

日常的な予防法としては、「外出時はマスクを着用し、なるべく人ごみを避ける」「帰宅時にはうがい、手洗いをする」などです。感染の疑いがある場合は、医療機関で早目に受診することです。